

<p>佐々木課長</p>	<p>このパートナーシップ運営協議会は、ここ数年、年二回開催をしまして、この第二回目については、今年度の取り組みについて、皆様方にご紹介して、来年度に向けての方向性を皆様方からご意見をいただくという会になっております。後ほど担当の方から資料等の説明があるかと思っておりますので、どうぞご意見の方、よろしくお願ひしたいと思います。</p> <p>新潟市は、政令市移行を4月で10年を迎えるということで、市長からもこれまでの到達点はどうだったのか、課題はどうかを定義するようという指示を受けております。この地域と学校パートナーシップ事業は平成19年にスタートしましたので、今年度で10年を終える、そういう取り組みになります。</p> <p>私が記憶に残っている場面がありまして、平成18年度の教育フォーラムの所だと思っております。これから新潟市は、学・社・民の融合による教育を進めていきます。地域と共に歩む学校作りを進めていかなければならないです。地域連携の時代が来ました。学校もどんどん地域に開かれた、そういう風な取り組みをしていかなければなりませんね。ということで、次の年から、地域と学校パートナーシップ事業が始まりますよということで、パネルディスカッションを教育フォーラムでしたのではないかな、と思っているのです。その場面の中で、これからの地域と学校ってどんな関係になるのだろうか、というところでの、パネリストからのご意見が出てきて、ある方は「これからというのは地域と学校は対等な関係になっていくべきだと思いますよ」こういう意見を述べられました。しかしある一方で「対等という関係はあり得ないのではないの？特に教育についてはプロなのだから、学校は。こういうところは対等というのは難しいのではないの？」ということで、白熱した議論になったのではないかな、という風に思ったのですね。最終的に座長さんが、「まずは、学校の応援団作りからはじめてみませんか？」という事で、そのフォーラムは幕を閉じたのではないかな、という風に思います。</p> <p>その次の年から、国が学校支援地域本部事業、いわゆる学校の応援団作りをしましょうというのを進めています。新潟市はもうすでに昨年度で学校支援ボランティアの年間延べ人数が26万人にも達してしまっていて、たくさんの方から学校を支えていただいている、という所がありますが、ただその時の理念というのは、必ずしも応援団作りに終始してはいたわけではない。国が、昨年度に出しました答申の中でも、「これからは学校支援ではなくて、地域学校共同活動である。なので、支援本部事業も、協働活動本部事業、協働活動と名前を変えています。つまり学校に一方的に力を貸してもらいばかりではなくて、学校からも、双方向で地域と共に、子ども達を育てていきましょうね、という方向にきていますが、これは、パートナーシップ事業の要項を読んでも、すでに10年前から、新潟市が目指してきた姿である。私はそういう風に読み取っています。学・社・民の融合、その先にあるのは、学校作りでもあります。人作りであり、街作りでもある。この理念というのは、10年たっても、変わっていないと思います。ただ、かなり事業が認知するにつれて、この事業に期待するところも大きくなってきています。ですので、当初私たちが予定していたものと、少し事情が変わってきているものもあるのではないかなと思います。それがこれまでの、10年を振り返る取り組みになると思いますし、そこから私たちは、今後10年をどのようにして、この事業を進めていくか、ということを考えていかなければならない。そういう時期に来たのではないかな、という風に思っております。ですので、10年たった今の成果と課題について、今日は皆様方にお示ししようと思っておりますが、この事業をさらに続けていって、地域の元気、子ども達の元気、学校の元気、それぞれを元気にするために、どんな風な方向づけをしていかなければならないのか、ということについて、また皆様方から、ご意見をいただけたら、と思います。</p> <p>今日はどうぞ、よろしくお願ひいたします。</p>
<p>枝並補佐</p>	<p>それでは、資料の確認をさせていただきます。事前配布資料といたしまして、本日の資料の冊子を1冊、お送りしてあるかと思っております。本日の配布資料ですが、委員名簿が裏面に印刷してあります次第1枚、座席表、こちらの方の資料の追補版となりますのが1冊、お配りいたしております。不足のある方、いらっしゃいませんか。事前にお配りしたものは、なくても大丈夫です。</p> <p>それでは、これからの進行は、委員長にお願ひいたします。</p> <p>本日の会議は、14時30分終了予定ですので、よろしくお願ひいたします。</p>

委員長	<p>それでは、進行していきたいと思えます。こんにちは、森泉です。よろしくお願ひいたします。</p> <p>では次第に従って進めていきたいと思えますのでご協立お願ひいたします。次第3、議事の(1)、平成28年度の事業の成果と課題について、事務局の方から説明をお願ひいたします。</p>
緒方指導主事	<p>はい。それではよろしくお願ひいたします。本日ご用意いたしました、運営協議会資料の追補版をもとに、お話を申し上げます。先般、事前にお配りしたもののの中に(平成)28年度の数値が入っていないところがございます。これは集計がまだ滞っていないなかったものです。今回の追補版の中には、(平成)28年度の数値を入れたものですので、こちらでご説明をしたいと思えますので、よろしくお願ひいたします。なお、ボリュームが大変多くございます。事前にご覧いただいていると思えますので、ポイントを絞りまして、ご説明をさせていただきますことをお許しいただきたいと思えます。</p> <p>では、1枚めくっていただきますと、パートナーシップ事業の実施要項がございしますが、これは説明を割愛させていただきます。続きまして4頁をご覧ください。今年度の事業につきまして、簡単にご説明します。</p> <p>2番、今年度の活動と実績につきましてですが、地域教育コーディネーターの勤務につきましては、例年通りでございます。ただ、特別な執務に対する追加配当を、昨年度後半より充当してきています。その時間を記載しておきました。4頁1番下ですが、地域教育コーディネーターの数ですが、3月1日現在302名、ということで、後ほどお話申し上げますけれども、複数制を奨励するというところもありまして、約30名、昨年度、コーディネーターが増加しております。</p> <p>5頁からは、本事業に関わる研修についてです。その中でも、今年度新たに創設したものが5頁③の、新任コーディネーター研修です。新たにコーディネーターになっていただいた方々に、思いを持って、モチベーションを持って、頑張っていたいただきたい。そして基本的なスキルアップを図っていききたいということで、年2回、開催をさせていただきました。</p> <p>続きまして、6頁をご覧ください。教職員を対象とした研修が、⑥に記載してございます。今年度は、校長先生を対象とした研修を、2回実施いたしました。表の2番学校運営マネジメント研修では、地域連携協働の在り方、当課よりご説明をさせていただきます。3番、校長研修会では、各学校の地域連携協働の現状を、校長先生方から、グループワークを通して、具体の部分まで、意見交流をしていただくという場面を、用意いたしました。</p> <p>その下のグラフそして参加者の声につきましては、後でご覧いただければ、という風に思えます。</p> <p>7頁からは、事業にかかる調査結果をまとめておきました。7頁は、毎年新潟市が実施しております、新潟市生活学習意識調査という調査の中の、地域連携に関する調査を抜粋したものです。児童・生徒のアンケート調査によるものですが、すべての項目で、緩やかではありますが、肯定的な評価を子ども達は下しているという風に思っております。8頁、9頁、10頁は、パートナーシップ事業に関する意識調査になります。8頁をご覧ください。学力の向上、社会性の育成、自己肯定感の醸成を目指して、事業を実施しているところでもあります。教職員からのアンケート調査については、概ね高い数値が出ているところではあります。とは言いましても、増加傾向というよりは、今年度はもう横ばいというような、高いところで、横ばいの数値になっているのかな、という風に思っております。</p> <p>9頁、上の3つのグラフは、ボランティアの皆様からのアンケートの結果です。例年と同様に、子どもから喜びや元気をもらう、役立っているという実感がある、生きがいや生涯学習の場になっている、という高い評価をいただいています。下の2つのグラフは、今年度初めて実施をしました、地域団体向けの意識調査です。コミュニティ協議会、育成協議会と、地域の皆様がどうお考えになっているかということですが、活動を通して学校と地域の結びつきが深まっている、あるいは子どもが地域のことに関心を持ってきている、というものについてですが、肯定的な評価を多くいただいているかと思えます。</p> <p>10頁、11頁についてです。10頁は、コーディネーターの皆さんの意識調査の結果になります。概ね肯定的な評価をいただいています。数値が若干下がっている傾向があります。これは、以前に比べてという文言になっている関係も</p>

あるのかな、とっております。以前に比べて深まっているか、というと今まで通りだなととらえる人と、そうでもないという評価をいただくことになるのかな、という風に思っております。

今回、課題とそれから成果と課題について、特にご意見をいただけるようにとご用意したのが、11頁のアンケートです。パートナーシップ事業を進めるにあたっての、課題は何ですか。ということ、を、教職員、そしてコーディネーターの皆さんからとらせていただきました。上のグラフは合計を表したものの、下のグラフは教職員とコーディネーター別に表したものになります。上のグラフを見ますと、多いのが教職員の理解が課題である、あるいは教職員と地域のコミュニケーションが課題である、地域、保護者の理解が課題である、ということで、理解、コミュニケーションが上位を示している、という事が分かりました。これは、今後の私たちの課題かな、という風に思っています。

教職員とコーディネーターの分けたグラフの方になりますが、同様の結果にはなっているのですが、ここでは教職員とコーディネーターの意識の違いが、浮き彫りになります。まず教職員の理解が課題であると答えているのは、実は教職員の方が強いと感じていることが分かりました。コーディネーターさんよりも、先生の方が、自分たちの理解をもっとしなければ、ということになるのかと思います。逆に、地域、保護者の理解は、コーディネーターの皆さんの方が、課題だという風に捉えています。それから、社会教育施設との連携、コーディネーターの負担の軽減、活動へのニーズの増加、これを課題とするコーディネーターの皆さんは比較的多いのですが、先生方はこれをあまり課題ととらえていない、という違いも浮き彫りになっています。やはり取り組む仕事内容が異なりますので、こういう違いが出てくるのだな、ということを感じております。

続きまして12頁に進みたいと思います。

事業報告書に記載しました、実数になります。今年度（平成28年度）のベポボランティア数なのですが、26万9,096人ということで、約27万人。昨年度に比べて、約1万人のベポボランティアが増えています。のべ事業数も昨年度に比べて若干ではありますが、増えています。そして、本年度新たに設けたグラフなのですが、地域貢献活動実施校の推移です。地域に対して貢献する子ども達の活動の変化を経年で表しているのですが、非常に大きく増えてきているということが分かります。実施校は全てで167校になりますので、この中の地域イベント149校が実施しているということは、ほとんどの学校がこのような形で地域の貢献活動に取り組んでいるということが分かりました。

これは平成23年度に比べるとものすごく大きな変化となっている、ということになります。ということは逆に言うと、学校の活動数が増えている、コーディネーターの皆さんが担当するお仕事も増えているということにつながる、ということになります。13頁、14頁は、7月、11月に実施いたしました、地域教育コーディネーターの勤務実態調査によるものです。地域教育コーディネーターの活動の種類が増え、業務量も増えているのではないかと、というご意見を昨年度からいただいておりましたので、実態調査を実施いたしました。1番左上の小さいグラフなのですが、1ヶ月当たりの講師別勤務時間を表しています。これをもとにしますと、中学校・中等教育学校は、月平均6.9時間。オーバーワークであるということを表しています。小学校・特別支援学校は、13.3時間オーバーワークであるということを表しています。これはコーディネーターの皆さんから、実際の執務から毎日集計を取っていただいたものですので、だいぶ正確な数字ではないのかな、という風に思います。私たちがご提供している勤務時間で足りなくて、そこにはまらないものをサービス残業かのようにしていただいているんじゃないかと分かります。配当時間が適切かどうか。仕事量が増えているのかどうか。ニーズが増えているかどうか。それぞれについてもコーディネーターの皆さんから、仕事の量が増えていて大変であるという声をいただいていることが、グラフからも分かるかと思えます。

続いて14頁です。今年度より、パートナーシップ事業の、地域教育コーディネーターの複数制を奨励しているのですが、この複数制の良い点、課題はなにかという事で調査をさせていただいたものです。複数制の仕事内容の分担については、役割を分担している、曜日を分担している、明確な分担をしていない、などそれぞれ分かれています。勤務時間をどう割り振っているかについては、内容に

よってその都度という学校と、きちんと仕事内容によって振り分けているという学校とに分かれているようです。複数制の良い点は、大きく3つ挙がっています。困った時に相談しやすい、役割を分担できる、休まなければならない時に代わって仕事をしてもらえる、という風な評価をいただいております。一方で、連絡調整に時間がかかる、パソコンや携帯などが1台しかないのが不便である、1人当たりの勤務時間が少なくなる、という課題も挙げられています。

続いて、その他の実績等についてご報告をいたします。15頁(4)受賞という部分です。今年度から文部科学大臣表彰の名称が変わりました。昨年度までは、優れた学校支援活動であったのですが、今年度から地域学校協働活動推進にかかる文部科学大臣表彰に名称が変わっております。今年度は新潟小学校と早通中学校が受賞いたしました。また、新潟小学校につきましては優秀事例として、実践発表をしていただきました。これは、全国のすべての受賞校の中の第1校のみです。ですので、国としても素晴らしい実践をという風に取り上げていただいたのであろう、という風に思っております。

15頁下になりますが、市民への周知広報活動です。市報にいがたを始め、区の便りなどで広報活動をいたしました。特に区の便りではのべ34回、パートナーシップ事業、地域教育コーディネーター、地域連携の取り組みについて、掲載をしていただいております。

16頁に移ります。今年度より、45校に拡充しました関連事業の、地域と学校ドリムプロジェクト支援事業です。主旨は割愛させていただきます。認定校は記載の通りです。③アンケートの結果についてですが、27年度に比べますと、参加者が12,768人ということで、約4倍に増えています。またアンケートの回収率も16.7%ということで、非常に率が高くなっています。この事業、そして地域と学校ウェルカム参観日を通じまして、地域との連携協働にご理解をいただく地域、保護者の皆さんが増えたのではないかな、という風に思っています。アンケート項目問1には、「地域と学校パートナーシップ事業が行われている事をご存じでしたか」、という質問ですが、実は66%の皆さんが「よく分からない・知らない」という声をいただきました。逆に言うと、こういう皆さんからご参加いただくことで、地域と学校パートナーシップ事業を知っていただいたのではないかなという風にも思っております。

17頁に進みます。参考となる教育委員会事業です。私どもが所管していることではないのですが、一昨年より中学校区ミーティングを実施し、中学校区ごとに学校、地域の皆さま、行政が、地域の連携について話し合いをする機会を設けています。今年度は24中学校で実施しています。

最後に成果と課題について、申し上げます。(1)それぞれの立場から見た成果という事になりますが、子どもにとってということでは、学力の向上、社会性の育成、自己肯定感の伸長に、大きな繋がりがあるのではないかな、という風に思っております。地域にとってですが、特に先ほどのグラフにお示しした通り、地域に貢献する活動、地域と交流する活動が増えていて、地域の活性化につながっているのではないかな、という風に思っております。学校にとっては、地域と学校ウェルカム参観日でのご紹介など、各学校の特色ある教育活動が進められているかと思えます。社会教育施設等にとっては、今年度初めて研修に図書館職員に参加していただいたり、交流を深めようとしております。まだまだ充分とは言えないかもしれませんが、よりいっそう勉強を深めていく必要があると思えます。

18頁に移ります。今年度のパートナーシップ事業には、4つの重点的な方策を設けておりましたので、このことについてお話をします。①、地域教育コーディネーターの勤務環境改善についてです。コーディネーターの複数制を奨励しております。役割分担など、一定の効果があがっているのではないかな、ということで、調査からは見てとれます。それから勤務実態調査を実施いたしましたので、コーディネーターの皆さんの実際の出務状況を、概略ではありますが把握することができたかなと思っております。

2つ目、研修の充実ですが、新任コーディネーター研修を実施して、不安の中、仕事を進めていくコーディネーターの皆さんを、側面から支えられるような形で、今年度は実施いたしました。新任のコーディネーターの皆さんからも、非常に高い評価をいただいております。また、アドバイスコordinaterを配置することで、気軽に相談できるという役割が整ってきたかな、という風に思っており

	<p>ます。</p> <p>③特色ある活動と周囲への周知については、地域と学校ウェルカム参観日を拡充した結果、多くの保護者、地域住民の皆さんに、周知することになったと思っております。</p> <p>④執行しやすい予算配当ということで、配当方法を変えた結果、予算の残額が極めて減りました。有効に使っていただけているのかな、という風に思っております。</p> <p>最後に、今後の課題についてお話申し上げます。ぜひ、後ほどご意見をいただきたいところです。事業開始から、10年経過いたしました。学・社・民の融合による教育の意義については、10年経った時により強化された部分、あるいは学校と地域が、それぞれの思いのずれが生じてきている部分もあるかと思えます。これを再度確認しながら、持続可能な事業として継続的に充実が図れるようにしなければならない、と思っています。現在、拡大から持続へ、ということを含言葉に、コーディネーターの皆さんにはお話をしている所です。数を増やす、ボランティアを増やす、というような数が目的ではありません。その質的変容を、今後はよりいっそう目指していく必要がある、と考えています。公民館をはじめとする社会教育施設と、さらに連携を進めていく必要があるかと思えます。現在、各学校と公民館のこうした取り組みも進んでいます。それを、全市的にも広めていくことで、循環型生涯学習社会へつながっていくという風に考えます。</p> <p>3番目、研修の充実、周知の機会の拡大などの手立てを講じて、先ほど課題にあげられた教職員の事業に対する理解をいっそう深めていく必要があるかと思っております。</p> <p>4点目、これは継続ですが、地域教育コーディネーターのスキルアップを図るための情報交換の機会、研修の内容の工夫を続けていきます。</p> <p>5点目です。地域教育コーディネーターの皆さんの、依頼される仕事の種類、仕事の量が増えています。地域教育コーディネーターと、学校、地域の役割をまず明確にして、各校の取り組みを重点化して、何でもかんでもやれではなくて、重点化していくことが、これからの地域連携協働が、持続可能なものへとつながっていくと感じています。</p> <p>最後、広報活動をより工夫していきたいと思えます。以上です。</p>
委員長	<p>ありがとうございました。あと30分ですので、お1人5分も話をしちゃうと時間が来ちゃうという感じがしないでもないですが、どこからでも結構です。資料の部分、いろいろグラフが出ていたり、そこで読み取れることも多いのですが、そういったところでは質問というふうではなく、今の成果と課題のところできゅっと凝縮されているような感じがします。具体的なところは資料の部分を見ながら、この成果と課題あたりでのご意見をいただければありがたいな、という風に思えます。</p> <p>それでは、質問、意見、どこからでも結構なので。気づいたところから、どんどん言っていただくことが大事かな。</p> <p>どうぞ。</p>
女性	<p>課題の1つにあるのですけれども、教職員の理解が求められているということなのですけれども、実際経年変化では教職員の理解度はどのような実情なのでしょうか。毎年このように、例えば11ページのグラフのように教職員の理解についての数値が示されていて、少しは減ってきているのか、横ばいなのか、逆に増えているのか、事務局の方わかりましたら教えてください。</p>
委員長	<p>今年、ということですよ。</p>
緒方指導主事	<p>はい。11ページのこのグラフについては、今年度初めてとったものですので、これまでの情報というものは一切ございません。理解が増えているのか減っているのかというグラフは、実際はない状態です。ただ、昨年度・今年度と新採用教員研修や12年目経験研修などで、同様の質問をしたときに、やはり理解が充分でないと思われるような反応を先生方は示していることはありました。例えば学・社・民の融合による教育の「学」「社」「民」のこととは何のことだと思えますか、という質問をさせていただき、地域教育コーディネーターは新潟市の職員である、丸だと思えますか、バツだと思えますか、というような質問をさせていただきました。そのひとつひとつが充分であったかということ、あまり高くない数字が出ているということになります。</p>

委員長	<p>よろしいでしょうか。 他にいかがでしょうか。 関連しなくても構いません。</p>
男性	<p>ひとつわたしの方からお聞きしてもよろしいですか。意識調査について、経年比較していて、これまで、年数が進むにつれてかなり「そう思う」、「ややそう思う」そのプラス評価が伸びてきているのですけれども、26年度、27年度くらいから、その伸びが鈍り始めていたり、またさらに、逆に少し停滞しているような所があります。そのひとつに例えばコーディネーターさんの回答の中で、保護者の理解が深まっているか、地域の理解が深まってきているか、については、26年度をピークにして少しずつ下がってきている所があるのです。それは、以前に比べて、とそういう質問のしかたであるのか。いや、そうではない、実情はこういうところで理解してほしいなというものがあるのかどうか、そのあたり、今コーディネーターさんがいらっしゃるので現場の感覚でお話してもらえるとありがたいです。いかがでしょうか。</p>
井浦委員	<p>私も実は、事前にいただいた資料に三角をつけていまして、ああ、減っているのだな、という風に思いました。ただ私は実際コーディネーターなので、私もたぶん、こういう回答をしたと。あてはまるのではなくて、ややあてはまる、もしくはあまりというか、そちらのほうになったかもしれません。といたしますのは、コーディネーターの人は、もっと理解してもらいたいんだ、本当は。保護者、あるいは地域住民には、もっともっと理解してもらいたいんだ、という願望があるのですね。私もそう思っています。なので、本当はもっと理解してもらいたいのですが、まだこの程度かと。なのでまだまだだな、そういうような感覚だと思います。実際はどうかというと、ずいぶんと理解は深まっているのだと思います。実際の地域の方、あるいは保護者の方の理解は、以前よりは増えているとは思いますが。ただ、コーディネーターの立場でいうと、もっと増やしたいのだという風な感覚なので、こういうアンケート結果が出るのではないかな、という風に思います。</p> <p>それで、どうしたらいいのだということなのですが、少し私の経験で言いますと、中学校区でやったミーティングがありましたね。あれが結構よいのではないかな、実際にそこに出たのですね。地域の代表者の方が大勢集まっていますから、そういうところでこういう地域と学校パートナーシップ事業をやっていると、具体的な質問、例えばコーディネーターだよりを持って行って話をしますね。回覧もやっているのですけれども、それだけではやはりだめで、実際に体験してもらおう。あるいは体験の場に出てもらおう、そういう風なことで、中学校区ごとの教育ミーティングとか、そういう場でボランティアをやっているのですという事を広める。まずは、地域の代表の方に広めていく。次に、もう少し下に来て広めていくという風なことが必要なのではないかな、という風に思いました。コーディネーターとしてはどンドンどンドン、地域の色々な団体に出てくださいという要請がたくさんきますのでね、それはコーディネーターとして大変なことなのですが、逆にPRする機会が増えるので、いいのかな、と。そうすると、理解が深まっていくのではないかな、という風に思います。ただ、やはり時間数が足りないという意見はやはりあります。どうしても、どこかで調整している。何とか年度末に、3月になると時間が足りなくなって、従来ですとボランティアでやっていたのですけれども、8月頃に、休みの時に調整しなければいけない、ということもやっておりまして、少し時間が足りないという学校があると思います。そのへん、少し考えていったほうがよいのかな、という風に思います。アンケートの結果はそんなふうになっています。</p>
倉島委員	<p>私は小学校しかやっていないので、小学校の事に限ってしまうのですけれども、保護者に理解というのはなかなか難しいのかな、と。私、自分の仕事をどう説明したらいいのか悩みます、すごく。保護者は10年たってもものすごく若い。自分の子どもみたいな人が保護者でやってくる。入学式見てびっくりするような。本当にびっくりする。うわあって思っちゃうような方が保護者でやってきて、その人たちに、分かってもらおうように説明するのがすごく難しいのです、やっぱり。お手紙を配ります、お便りを作ります、配っても読まない、見ない。写真がたくさんあれば写真をぱっと見るけれど、文章は読むというのがものすごくやはり少ない感じがする。一生懸命こっちは作って発信するのですけれども、さっと</p>

	<p>見ている感じだったりするのです。保護者の方は。それで、地域の方はすごく理解してくださって、何年も一緒にやっていたら、私が毎日いないっていうことをすごく残念がってくれるほどに。「この間行ったときいなかったねっけ！」とすごく怒られて、「すみません、休みです」「休みがあるんけ！」とか言われて、そんなくらいにすごく地域の方には良くしていただいているのですけれども、保護者の方はやっぱり働いている方も多し、ぎりぎりいっぱい毎日やっていたら、もう見ないことが多分多いと思います。何か発信の方法を変えるとか、先生方にもやはり理解してもらって、先生方の口からも説明していただきたいな、というのはあるのです。先生が言うことというのはやはり大きいですね。先生がこう言っていた、子どもに対してでもいいのです。ボランティアの人たちがこういう形でやった、ということ子どもに言ってもらえば、子どもが親にしゃべる。そっちのほうの方がよっぽど伝わるのではないのかなと思って。</p> <p>親に言っても、限界があるのです。何度も何度もお手紙を出しても、全く理解してもらえない。当日になって、道具を持ってこない子が多い。という事を目の当たりにしていると、何かきつともう少し発信の方法を変えるのも、ありなのかなと思ったりもしました。</p> <p>やはり先生方には、先生が異動されると、よく分かっている先生が動いて、別の学校から来られた先生が分からない。学校で全て同じではないですから、「コーディネーターさんってここまでしてくれるの？」という方もいらっしゃれば、「え、そんなことしかないの？」と言われる方もいらっしゃいます。今年すごく言われたのが、「最終的には教育課程が優先だからね。」私たちは、教育課程にしたがってお手伝いをしているはずなのに、教育課程が優先だからね。と言われると「じゃあなんなのだろう」と思ってしまっ</p> <p>ボランティアの人が来るって。こうやって、こういう風に去年やっていた、それはどんな効果があるの、いやそれ、私に聞く？みたいな感じで、それはそちらが考えて、子どもにどういった効果があるかとか、あたえられるかという事を先生が考えることだと思ったのですけれども、そっちでしょと言いかかったのをぐっと飲み込んで、「ええと、すごく楽しいですし。」など色々言ってみたのですけれども、来ていただく方にもすごく失礼だな、と思って。時間を割いてきていただいて、確かに先生ではない、専門的な説明もできません。思っているような事がならないかもしれないのですけれども、こちらのかただって、準備をしてきてくださっているのだし、それをうまく引き出さなければ、そして理解して、伝えていただければなあ、というのが、今年1年、少し多かったもので。</p>
<p>委員長</p>	<p>2人のコーディネーターさんから現場の意見をお聞きしました。生々しいですね。</p> <p>意識の違いというのは確かに11頁のグラフにはないのですけれども、当事者意識が高まれば高まるほど、自分たちがやらなくてはいけない、という問題意識を感じてくる方々と、そもそもスタートからして知らない、という感じの意識の問題もあるようですが、実態をお聞きして感じました。</p> <p>職員研修はやっておられますよね？特に管理職研修、それと、教員の年代別というか節目ごとの研修はやっているのですけれども、今倉島委員から出たような現場の実態と状況がある。そこは課題にもあがっています。職員の意識、事業に対する理解をいっそう促す必要があります。そのあたり結構重要な感じがするんですけど何かご意見をお持ちの方はいらっしゃいますか。</p>
<p>藤井委員</p>	<p>この問題は、それぞれの地域と学校との関係があるので、一括りにはできないところがあると思います。私の例で言いますと、私は地域のボランティアとして、学校にはまっています。コーディネーターではないのですけれども。コーディネーターに言われて、ボランティアをやるのですけれどもね。私のやっているのは1番、学習ボランティアという形で、主に高学年の授業の中に、担任の補助みたいな形で、担任が授業をして私が分からない子の手伝いをするという形ではまっていますのです。そんな風で、私毎日行っているのです。そういう風な人が何人かいるのです。そうしますと、先生方も最初は奇異に感じたかもしれませんが、だんだん慣れていくうちに、子どもと接触していくうちに、担任と接触していくうちに、だんだんと雰囲気が変わってきて理解が変わってくるというのが見えてきたので</p>

	<p>す。当然、何年何組の授業に、手伝いに行く。テキスト、何年何組の担任の了解のもとで、当然行くわけです。来てください、いいですよ、ようはそうやって数をこなすことによって、変わってくるということはありますよね。継続的に毎日やってたらなおさら。そうすると先生方の意識も、初めはあいつなんだ？という感じだったのが、変わってくる。</p> <p>そういう風な継続的なものと、その他に、単発的なイベントみたいなものがあります。私の所、田植えから稲刈りまで全部やるのですよ。その時、私ももちろん学習ボランティアと同時に、地域のボランティアとしても参加して、子どもと一緒に田植え、稲刈り、農家の人を中心になって、指導してくださる、という風なことで、結構、深くかかわりました。そうしたら、地域の人も理解する。という風な事が出てきているのだな、と。学校のなかでは地域の茶の間なんかを作ったりしていますね。年配の方がお茶飲んでいますからね。その人たちも、ボランティアとして手伝ってくれる。色んな面で。家庭科手伝ったり、畑作ったり。そういう風なものがあります。</p> <p>最近少し、もう10年経ったから、うちらも考えなければだめだといってコーディネーターと話をすることは、今、課題といっているような中の1つになるかもしれないけれども、どうやってもっと多くの人に、意識をもってもらって、それこそ融合から協働というふうなものをつくりあげていかん、ということを考えて模索していますけど、まだ、模索の段階。方向としては、佐々木課長さんがおっしゃったようなことをやっていこうか、じゃあ何をやる、どういうやり方をする、そうすると一本釣りをお願いとやっていた、地域の人をお願いしていたのを、これをどうやって広げていくか。全家庭配布でたよりを流すのですけれども、来る人は来るけれど、来ない。そうするとどうしても一本釣りみたいになってしまう。だけど、人から人をつなぐ時に、もともとの地域策定ではないですけれども、それも1つのやり方。</p> <p>もう1つはふれあいスクールをやっています。地域がふれあいスクールを持って、PTAが学校と3者がやっているのですけれども、その時、PTAの方、地域の人も皆そうだけれども、忙しい方、特にPTAの方は、働き盛りだし、なかなか大変だけれども、年に1回でいいから、我が子を見に来ていただきたいな、そんな感じ。例えば入学式。色々ありますよね。あるいは新1年生の説明会とか。そういう場面を使って、一言しゃべってもらおうということで、そういう場合や機会を使ってやらせてもらってます。参考になるかはわかりませんが。</p>
委員長	<p>はい、ありがとうございます。やはり現場の意見、貴重なご意見をいただきました。</p> <p>結局数をこなす中で、子どもとのふれあいの場所を増やしていく中で、先生方は雰囲気的にたぶん変わっていくと思います。教員とはおかしなもので、そのことによって子どもが一ミリでも変わってくると、えっ、これはなんでなんだ、と。要するに地域の方とかかわったことで子どもがぐっと変わったという感触、感覚がするだけで全然違う。実際8頁の「学力向上につながっている」「社会性がついている」「自己肯定感が高まっているんだ」という評価をされている方もたくさんいらっしゃると思います。それを実感されていない。</p>
藤井委員	<p>一つ付け足していいですか。今ひとつ悩みは中学の方にもいろいろお手伝いに行きます。マラソン大会があるとかね。コミ協とか育成協とか。そういうイベント的なものはいいんですけど、継続的なものをどうやったら良いかなというのを悩むと同時に、小学校より中学の先生方のこの事業に対する理解度というのかな、中学の先生方というのは難しいなど。それこそさっき言った教育課程～ではないけど、許可制のね、非常に難しい。難しい中でどれやる？という、それも模索です。以上です。</p>
委員長	<p>貴重なつけたしでございました。</p> <p>中学校区での活動というのは、色んな活動のところの根元にあるような気がしますけど。教育課程って教諭が編制するものですね。そこに、なぜこの活動が組み込まれてこないのかということの方が、カリキュラムのマネジメントの力がない管理職。義務教育現場を外れちゃうと好きなことを言えちゃいますけど。</p>
委員	<p>関連なのですけれども、この前、教頭先生とお話したのですが、教職員の方の理解を深めていかないとだめだな、というのはやはり認識としてはあるのですね。私はもう7年やっていますので、長くいる先生はコーディネーターがどんな</p>

	<p>ことやっているかとかみんな分かっていらっしゃるのです。色々と頼みに行っている。だけど、新しい先生方は、分からない方が多いです。それで、なんであの人たちが勝手に校内に入っているのだろう。例えば、庭作り公園隊とあるのですが、勝手に校庭の花壇の草取りをする、肥料を入れたりしているわけですね。子ども達が登校する7時半頃になると、もう終わっていて、東屋でお菓子を食べて、お茶を飲んでいるわけですよ。校庭の中で、あの人たちは何だ？と。分からないですよ。当然。分かっている人は、分かっているのです。なので、例えば新しい先生が来られた時には、どんな活動をしているのか、あの人たちはどういう人たちなのかというのをやはり教えてあげないとだめですね。というようなことで、4月に新しい先生方がたくさん来られた時、若い先生もいるので、コーディネーターの学校としての研修を、先生たちも長い時間をかけなくても結構ですが、それはやはり必要ですね、と。だから、これからみんなやりましょう。というような話になりました。</p> <p>ややもするともう慣れているので、もういいのかな、と思ったりもします。しかし、基本は基本なので、きちっとやる必要があります。4月だけではなくて、時間があれば、先生方は忙しいので難しいですが、そういう時間を取って研修会。私たちの学校は、一昨年までは夏休みを利用して、“地域巡検”とって、地域の名所などをコーディネーターが案内してくれるということをやっていたのです。それを昨年、新しい教務主任になって忘れていまして、時間がとれなかったのです。間際にやると頼まれたのですけれども、間際だから対応できなかった。数か所ちゃんと行かなきゃダメなので、それなりに準備しなければダメなものですから。そういうこともありまして、やはり、どこかで先生方の教育も必要だ。地域にはこんなものがあるのだ、ということも、先生方に知っていただく必要がある。やはり基本は基本として、こういう研修はきちっとやる。全体研修ももちろんやられてると思いますが、学校としての教育も必要であろうという風に思います。コーディネーターも、もちろんその場で襟を正して、基本に戻ってきちんと勉強すると、地域の事を勉強するということも必要ですね。そんな風に思います。</p>
委員長	<p>ありがとうございます。あと5分。 少し深めたいところもありますが、1人ずつ意見を言っていただくことも大事なかな、と。春日委員お願いします。</p>
春日委員	<p>アンケートの中で少し質問したいことがあります。教員とコーディネーターさんの所で、「活動へのニーズを増加」というところで、課題を持っているという所なのですけれども、これは、どういう・・・？依頼されることが多いと、ということでしょうか？</p>
緒方指導主事	<p>13頁の、2番の説明でしょうか？</p>
春日委員	<p>11ページの…</p>
緒方指導主事	<p>活動へのニーズの増加、という所ですね。 活動へのニーズの増加に対応できないという風に、あるいは対応が追いつけないというような課題という風にとらえていました。</p>
春日委員	<p>コーディネーターさんが、ということですかね。</p>
緒方指導主事	<p>コーディネーターの皆さんの割合が高いということは。</p>
春日委員	<p>分かりました。それから、依頼や調整に苦心されているということですので、何度も言っているのですけれども、社会福祉協議会もボランティアコーディネーターも含めて、社会資源を持っていますので、もしよろしければ、声をかけていただいて、できる機会があれば、いいのかなと思っております。</p>
委員長	<p>はい、ありがとうございます。</p>
三保委員	<p>はい。だいぶ浸透してきているな、と思うのですけれども、やはり先ほど言われたように、先生によって、認識の差があるというのは否めないかな、と思います。だいぶ理解は深まって、ボランティアさんを受けるだけではなくて、学校の外へ子ども達が行く。そういうような段階に来てると思うのですけれども、まだ手伝ってもらおうという意識のところもあると思います。今年から、学校をめぐることも多くなったのですけれども、学校毎に色々とあります。入口に「〇〇があるので来ませんか」とよく書いてあるんですけど、「ボランティアの皆さんよう来なさった」というのが一つもなかったような気がするんですよ。住民の方</p>

	<p>も「ありがとね」と言われれば喜んでまた来ようと思うと思うので、1つ張り合いになるものがあるといいかな、という風に思います。</p> <p>今回図書館として、研修に参加させていただきました。図書館はまだ1年目なので、私達何をすればいいのだろうか、という戸惑いがあります。おいおい、こういう風にしたら？というのを言っていきたいと思いますし、学校の方からも要望とか。学校図書館もあるので、連携をどういうふうにしていくか。というのは考えていきたいと思います。</p> <p>私は地域住民として回覧板を見たりしますが、ボランティアで行く人は少し勉強されているのかな、という気がします。どういう風に地域に広く浸透させていくのか、というのを考えながらいきたいなと思っております。</p>
委員長	今指摘がありました、校長先生として、河内委員。
河内委員	<p>校長会で今年、アンケートを取りました。パートナーシップ事業について、地域連携についてということで、そういう学校分掌に位置づけているかどうかという質問と、教育課程の編成についてパートナーシップ事業を編成に活かしているか。そのあたりのアンケート調査をしたところ、ほぼ100%に近い状態でした。事業がスタートした時には、およそ想像がつかない状況で、たいへん喜ばしいと思っています。形はできて、あとはさらに中身が充実していくといいな、という風に考えております。</p> <p>コーディネーターさんに対して学校職員がどんな風に接するかとか、同僚のだけれども正規職員ではないという事のお付き合いのしかたを、やはり校長がリーダーシップを発揮して、大事な仲間であるけれども、限られた勤務時間の中で活躍してもらっているの、できない時、できない限界があるので、そこは教職員が引き継ぐ、あるいは補うということが非常に大切になっております。先ほどコーディネーターのお二方がおっしゃっていたように、年度当初に、きちんと職員にそれぞれの職務のあり方、お互いが気持ちよく仕事できるように、そんなことを校長として伝えていくべきだと自戒を込めて感じました。</p> <p>率直な意見としては、7頁にある、子ども達がいった地域の方々が学校につながることをどんな風に感じているかが、最も大事な、ということで、大変よろこばしい状況だという風に感謝しております。</p> <p>今後は、次の学習指導要領の方向性がしめされたように、社会にいかされた教育課程の編成ということで、新潟市が10年前にも全国の前の方を走っているのだというように甘んじないで、本当に学・社・民の融合の真価が問われるのはこれからだと思います。自分自身としてはもう今年度末をもって終わりなのですが、ただ地域教育推進にあたっては学校評議委員など既存の組織を活かして、全てでなくても、一緒に企画運営するプログラムを年に1回でも作れると、これからの国の方向にも寄り添った形のものができるのではないかな、という風にまたパートナーシップ事業には大いに期待しています。</p>
委員長	教育委員会の方から脇野先生お願いします。
脇野委員	<p>はい、少しまとまっていらないですが、18頁の今後の課題のところかというと、どうしても私の個人的な意見で申し訳ないのですけれども、3番・4番が少し疑問で、成熟してきたからこそ、地域教育コーディネーターが誰でもできるという、そういう風になるべきではないか。これ以上スキルアップする必要があるのかな、というか。そういう風にしていかないと、なんかこの人でないとできないというのも良いとは思いますが、それはなんと云えばいいのでしょうか、もっと柔らかくなって、浸透していくにはそういう方向になるので、そういう風にしていくべきなのでは…そりゃあ最初は、もう少し管理職の自覚や、覚悟が必要だと思いますが。方向としては私は逆なのではないか、スキルアップしなければできないのだったら、ハードルどんどん高くなっていくので、私はそうでないほうが成熟するのではないか、という風に思っております。以上です。</p>
委員長	最後は田村委員お願いします。
田村委員	<p>遅れてきて申し訳ございませんでした。ちょうど保護者の電話に出ていました。少し悩んでいるかただったのですが、この場に来てみると、そのお母さんって、パートナーシップ事業に関わったことがあるのかな、地域の事に参加したことがあるのかな、ということをおもいますね。あの硬いしゃべり方を見ていると、学校の中に入っていったいない方ではないかなという風に推測されました。パートナ</p>

	<p>ーシップ事業を通じて学校に何度か入り込んでいくと、校長と仲良くなりますし担任とも仲良くなりますので、そういう関係ができていくと、子どもの抱えている問題を解決していくのではないかなという風に感じました。この事業の意義って、やはり大事だなということを痛感しております。</p> <p>教職員課なんですけど、11頁の「教職員の理解」というのが非常にショッキングでした。まだこんなこと言っているのか、と。まかせっきりの時代というのは終わっているはずだと思っていました。教育課程に効果があると実感している時代だと思っていたのですが、まだこんな段階なのかと非常にショックでした。</p> <p>これを改善していくためにはどうするかというと、やはりくり返しのレクチャーもそうなのでしょうけれども、保護者の方が、全員が参加しなければいけないような事業を組み込んでいく。そして教員もそれに参加して成果があがっていくというようなものを、くり返しやっていかなければならない。それが校長のカリキュラムマネジメントの力にかかっているのだらうなということを強く感じました。</p> <p>つけたしになりますが、今パートナーシップ事業で育ってきた子達が、もうしばらくすると成人し、親の世代になっていくわけです。親になったときに私たちがやっていることが1つ成果になると思うので、それまで地道に種まきしていく必要があるな、と思いました。</p>
委員長	<p>ありがとうございます。それでは、皆さんからご意見をいただいたということで、議事の(2)を終了したいと思います。</p> <p>それでは、続きまして(3)その他。事務局から何かございますか。</p>
緒方指導主事	<p>特にございませぬ。</p>
委員長	<p>それでは本日は貴重なご意見ありがとうございました。意見を深めたい、交換したいなというのがございましたけれども、貴重なご意見いただいたものと思います。</p> <p>最初に課長様から今後の10年を見越すように、方向性を出すように、というようなことで、少しお答えしづらいところもあったと思います。こういった、小さな声、現場の声、その積み重ねもすごく大事だと思います。事務局でご意見活かしていただければな、と思います。</p> <p>それでは、以上で議事を終了したいと思います。</p> <p>ありがとうございます。</p>
課長	<p>今ほど、森泉委員長さんから、1時間と短い中で、色々な意見を引き出していただきました。ありがとうございます。もう少し時間があれば、もっともってご意見いただけたかと思ひます。</p> <p>私、今日お話しを聞いていて感じたことは、10年たって、分かっているだろうと思われている事が、なかなかまだわかっていただけていない。こういう現状があるのだなあとということと、私どもも研修の中でお話していることがまだまだ実行に落とし込めていない、そういう現状もあるのかな。そう考えていくと、これから新しい学習指導要領が実施される中で、社会に開かれた教育課程を作っていく中では、この事業は本当にキーポイントになるものだと思います。そのための情報提供を私たちはしていかなければならないと思ひますし、それをもとに、今度は実行できるようなそういった働きかけをお願いしなければならないのかな、とに思ひます。学校の願ひ、地域の願ひ、そういうものは聞こえてきていますので、今後ともこの事業がずっと長く続いて皆さんが良かったといえるように成長させていきたいと思ひしております。どうぞよろしく願ひいたします。本日はどうも、ありがとうございます。</p>
枝並課長補佐	<p>それでは以上をもちまして、平成28年度第2回地域と学校パートナーシップ事業運営協議会を終了いたします。本日はご多用の中、お集まりいただきまして、たいへんありがとうございます。</p> <p>このあとすぐ、平成29年度地域と学校ドリームプロジェクト支援事業認定校にかかる選考委員会を行います。選考委員の方は、そのままお残りください。どうもありがとうございます。</p>